

脇息きょう 息そく

資料提供・文 竹中 寿美子

私が未だ小学校に入る前の年、母が大垣や岐阜方面に買い物に行った日は、いつも母の実家、神戸町本町の林家に預けられました。

母の実家は祖父一人で、下男かんきちの貫吉と女中のおさんの三人暮らし。

祖父はよく、日当たりの良いお座敷の床の間の前で、お布団に横になっていました。私が行くと「すみこか!」と言って起き上がり、枕もとの小さな茶ダンスから、おまんじゅうや羊かんを出してくれました。我が家では来客にしか出さないようなお菓子で、祖父は私が食べるのをニコニコして見ていました。いつもその脇には脇息があり、脇息にもたれて私が食べるのを眺めていた祖父でしたが、その姿は今もありません。

脇息を見る度に、祖父の笑顔と脇息がセットになって、何年経っても目に浮かびます。何時行っても脇息は祖父の手の届く周りに、起き上がればすぐ手の届く所にありました。祖父の亡き今は我が家にあり、目にする度に祖父やその当時を思い出す大切な品です。

▼正倉院「紫檀木画挟軼」



出典:宮内庁ホームページより

【語句説明】

「脇息」脇に置いて、もたれかかる為の安楽用具。歴史は古く、記紀では「几おし」、奈良時代に「挟軼」と呼ばれた。正倉院に「紫檀木画挟軼」として伝わっているのが現存する最古の物。体の前に置いて使用した。

協力 郷土史の会



▲小学校入学記念(両親、姉と)



▲祖父・林 恒次郎